

書評

芦谷信和著

『国木田独歩——比較文学的研究——』

北野昭彦

本書は、著者が『立命館文学』『花園大学研究紀要』『花園大学国文学論究』等に発表した独歩論のうちから、比較文学的論稿を中心にまとめて上梓されたもので、昭和五十七年十一月、和泉書院から刊行された。

本書に収められた諸論文のうちには、雑誌初出のときから私が注目し、拙稿中に引用させてもらったものもある。今、それらの集成された本書をまとめて読んでみて、私のコメントを正直にいえば、本書には研究史上きわめて高く評価すべき点と、不満の意を表して批判すべき点とが、相半ばしている。以下は、その個々の点について言及してみたい。

本書は次のように五つの章から成っている。

第一章 老荘の影響

第二章 王陽明の影響

第三章 ツルゲーネフの影響

第四章 「酒中日記」への一視点

第五章 詩から散文への移行

このうち、第一章と第二章は庄巻である。独歩と東洋の伝統との交渉を論じたものは従来からあったが、本格的な研究はなかった。

そこで著者は、独歩の日記・遺稿を再検討して老荘と王陽明の影響という二点に注目し、また老荘の書、王陽明の詩文とも読み比べて、そこに幾つかの連繋を見出した。その結果、独歩の思想形成史上における漢学・東洋思想の影響のうちで最も顕著なものは、老荘と王陽明の影響であり、これによって独歩の思想的根幹が形成されたということを具体的に論証した。これは著者の卓見と努力の産物である。

著者はまず、独歩を老荘思想に近づけた最初の文献として、彼が中学時代に愛読した馬琴の『夢想兵衛胡蝶物語』に注目し、この物語中に散見される馬琴の老荘理解と、独歩の思想的傾向との類似点を見出した。それは〈名利とエゴイズムの否定〉、〈永久無限の生命〉の思想、〈自然〉の思想の三点である。これは独歩の一生をおおう思想の根幹である。だから著者は、『夢想兵衛胡蝶物語』の愛読を、彼の老荘理解の伏線と見るのである。

つぎに著者は、独歩の「社会と人」「信念」(ともに『独歩遺文』所収)「欺かざるの記」等のなかに、独歩の思想形成とかわる老荘理解の痕跡を探り、さらに『老子道德経』『莊子内篇』『莊子外篇』『莊子雜篇』等の原典にも遡及して、そこに幾つかの類似点を見出した。それは〈名利とエゴイズムの否定〉、〈社会感〉の否定と「天地生存」の「個人感」、〈精神上の自我解放と心靈

の自由、〈永久無限の生命〉の思想、〈自然〉の思想であり、これを要約すれば、さきの〈名利とエゴイズムの否定〉、〈永久無限の生命〉の思想、〈自然〉の思想、という三点に帰結できると著者は見るのである。

独歩はその後、ワーズワスへの傾倒を深め、それにつれて老荘は関心の埒外へ置き去られていく。が、明治二十五年秋の、独歩の「精神上の大革命」の時点では、老荘への関心とその影響が、独歩のキリスト教受容やカーライル、ワーズワスへの開眼に重要な役割をはたしたという点を著者は重視する。これは、独歩の「精神上の大革命」を、明治期の文豪誕生にかかわる東西両文化の邂逅・激突・融合の内的ドラマとして、巨視的にとらえる上でも、貴重を手掛りを与えてくれる論考である。

同様のことが第二章についてもいえる。著者は王陽明の影響を二方面から考察している。一つは、独歩が吉田松陰への傾倒をとおして間接的に受けた王陽明の〈知行合一〉〈事上磨練〉の思想で、これは独歩の文学ではなく、教育観・教育実践上に感化を及ぼした。

もう一つは、王陽明の詩文による文学思想上の影響である。著者は、「社会と人」「信念」「欺かざるの記」等における、独歩の王陽明観の考察、独歩の引用した王陽明の詩文と、『王陽明文粹』『王陽明先生詩鈔』の原典本文との照合などをとおして、王陽明の影響によって形成された独歩の文学思想がいかなるものであったかを論証している。

それは、有限の人生と無限の宇宙自然との対比から生じる〈寂寞〉〈幽愁〉〈悲哀〉を痛感し、人間存在の不思議に驚く〈驚異〉の思想であった。これは、カーライル、ワーズワス、ツルゲーネフの影響と結合して、その後「牛肉と馬鈴薯」の〈驚異〉志向へと展開し、また、独歩の作品全体に漂う悲哀感となって流統しているという。これも著者の新説である。

第三章ではその〈悲哀感〉を中心に、ツルゲーネフからの影響について考察している。従来、独歩に及ぼしたツルゲーネフの影響は、自然描写に限定されているという塩田良平説が有力だった。しかし著者は、独歩の人間観はツルゲーネフに学んだものだという小山内薫説を支持して、独歩が二葉亭訳、英訳、今井忠治の翻訳紹介のいずれかを通して読んだと推定されるツルゲーネフの諸作を総点検し、その影響は人間観、人物造型、作品構成の手法の三点に及んでいるという新見を提示した。

著者によれば、ツルゲーネフに学んだ独歩の人間観は、永久無限の宇宙自然と、そのなかに浮沈する瞬間微小な人生の諸相とを対比的にとらえて、そこに人生の悲哀（著者のいう宇宙観的形而上的悲哀感）を痛感し、生のはかなさに驚くような人間観であり、それを具象化したのが独歩の描いた〈小民〉である。これには、キリスト教的人間平等観やワーズワスの影響も関与している。だが、独歩がこれを小説の形で表現する場合には、詩人ワーズワスよりも、小説家ツルゲーネフの手法に多くを学ばなければならなかった。

その手法とは、宇宙自然の無限性と人間の微小さとの対比から生じる悲哀感を表現するために、華やかな青春の歡樂を描いた中心部から歲月を経た時点を終局に設定し、そこに登場人物の死、永遠の生別、衰毫の殘曆などを添加することによって、尽きぬ哀感と余韻をかもし出すという作品構成の手法である。

これはツルゲーネフの諸作にみられる手法で、独歩の作品構成もこの手法に学んでいるという著者の新見には説得力がある。のみならず、ツルゲーネフの諸作にみられる民衆への共感も、独歩の「小民」への共感を一層深め、これを文学として結実させる上に強く作用したであろうという見解にも説得力がある。

第四章は、この比較文学的研究の成果を作品論に援用したものである。著者は「酒中日記」の主人公今蔵を「余計者」のタイプとしてとらえ、「酒中日記」をツルゲーネフの「余計者の日記」の影響下に成った作品として見直すとともに、独歩が二葉亭に傾倒していた事実にも注目し、「酒中日記」における二葉亭「浮雲」の影響についても考察している。この章では「浮雲」の影響についての論述で、今蔵——文三、とみ——お政、お光——お勢、兵士——昇という人物の対応関係、人物造型の面から「酒中日記」の作品世界をとらえ直しているところに説得力がある。

以上は、研究史上に評価されるべき著者の新見とその論旨の紹介だが、本書には不満の点、批判的に超克すべき弱点も少なからずある。

まず、本書は全体としてのまとまりを欠いている。個々の細部

にはすぐれた新見があるが、それらが個々に並列的で、全体が一つに構造化されていない。各部分の相互の緊密な連繫、有機的関連性が稀薄で、ことに第二章までの論が第三章以下に活かされていない。

著者は「はしがき」と第一章で、日本人による西欧文化の受容は「模倣ではなく」、「東洋的裏打ち」による「独自の日本化」であり、「一種のすぐれた創造であった」と述べ、「この日本人の創造性を見なければ、本当の比較文化とはいえない」と述べている。にもかかわらず、第四章では独歩の文学を西欧のリアリズム文学史観で裁断し、「ツルゲーネフが西欧主義者となり、近代的で豊かな人間尊重的思想と態度を身につけて、ロシア社会の後進性をより明快に觀察批判」したのに対し、「独歩は明治社会の枠から一步も出られなかった貪しさを背負っていた」から、「彼の文学のリアリズムは」「ツルゲーネフほどの写実性を具え得なかった」と述べている。

では、老荘・王陽明の影響という「東洋的裏打ち」による「独自の日本化」と「創造」という視点は、どうなったのか。これでは、第二章までのすぐれた新見を、著者自らの手で抹殺するという自己矛盾を犯すことになろう。

また第四章には、独歩の「写実主義の方面での優れた達成」として、「二少女」「窮死」「竹の木戸」の三作が特筆されている。だが、これもまた、著者がかつて「忘れえぬ人々」論で批判の対象とした狭いリアリズム文学史観に、自ら組するという自己矛盾

を犯すことにならう。一体、リアリズムとは何か。前記の三作だけが「優れた達成」として特筆されるようなリアリズムだけが、優れた文学の条件ではあるまい。独歩の文学の真価はもっと違ったところにあり、それを見落とせば、独歩の文学に内包されてい
た他の可能性や真の価値を取り逃がすことにならう。

著者は独歩の比較文学的研究をとおして、多くの新見・新事実を提示したが、著者の独歩観・独歩評価は、旧来の定説や文学史観の枠を出していない。細部の新発見の積み重ねをトータルな面での新しい独歩観・独歩評価へ真に活かすためには、もっと多様な文学の可能性を広く柔軟に包括しうる文学観・文学史観を用意する必要があるはしないか。著者は、独歩が松陰を介して得た王陽明の〈事上磨練〉の思想は、文学とは無関係だといっているが、「日の出」等の作品にその反映を見ることはできないか。また、独歩が佐伯の青年たちと近郊を逍遙したのは、〈事上磨練〉だけではなく、植村正久の「自然界の予言者ウォルズウォールス」の影響もあろう。植村は、「ウォルズウォールスは書室の思想者に非ず。彼は青天を戴き、緑草を踏み、水辺に座し、緑陰に憩ひて、思想を煉り、工夫を凝らすことを常習とせり」と述べている。このウォルズワスの方法でその詩境を体得しようとする志向に、〈事上磨練〉が結合したのだといえる。

そこで想起されるのは、著者が第五章で同時代作家として論じた岩野泡鳴が、独歩とはまた違った発想で王陽明を受容していることである。泡鳴は、「エマソンを熟読してゐると、おのづから

支那の王陽明の学風を思ひ出さないではゐられなくなると同時に、藤樹はその陽明を祖述したものであることがますます／＼忘れられなくなつた。(中略)僕はエマソンと王陽明とをいつも聯想する様になつた」(「王陽明とエマソン」)と語っている。そこで、

王陽明——松陰・ワーズワス——独歩

王陽明——藤樹・エマソン——泡鳴

という対比による比較研究もまた、興味深い研究課題となるであらう。

なお、著者が第二章に、独歩が波野英学塾で「カーライルを説いた」と記しているのは、上杉玉舟の誤りの踏襲であらう。独歩の文章中にカーライルの名が初めて見えるのは、塾を閉鎖し、再上京した後の明治二十五年九月二十二日の書簡からであり、これは「欺かざるの記」明治二十六年五月三十日の記事とも符合する。これは些細なことのようにだが、そうではない。老荘、王陽明、カーライル、ワーズワス等に触発されて独歩の「精神上の大革命」がもたらされたという、著者の論点と深くかわる問題なのである。

以上、後半には批判的なことを列記したが、これらの問題点があつても、前半に記した本書の研究史的価値はいささかも損われるものではない。むしろ私は、前半に記したように、本書によって多くのことを教えられ、問題意識を刺激されたことをあらためて一言して、著者の今後に期待したい。